

41412

教科書文庫

4
810
41-1913
20000 42773

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

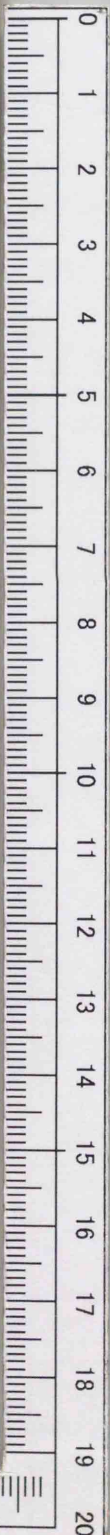
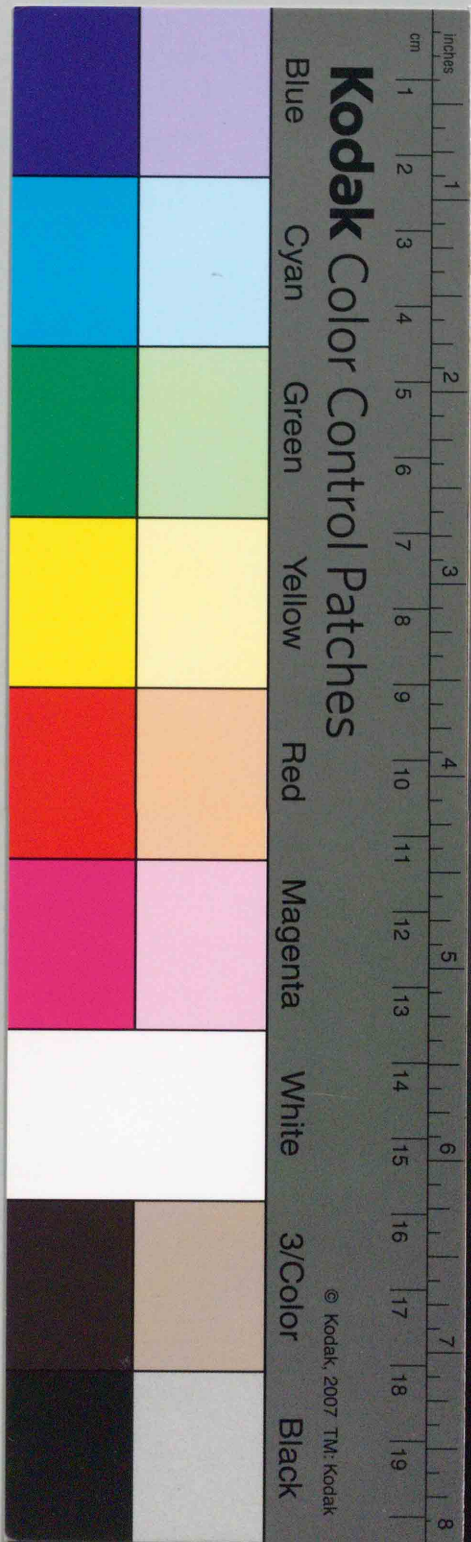


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
F10
資料室

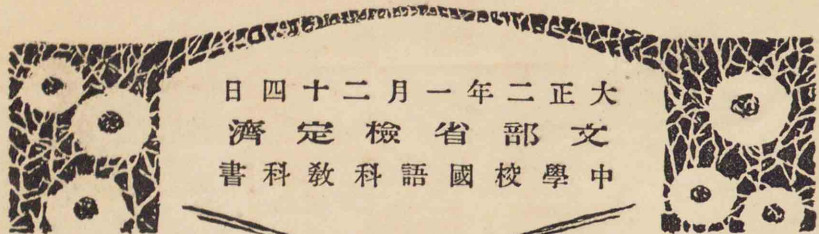
大正讀本

卷二



資料室

375.9
Fu10

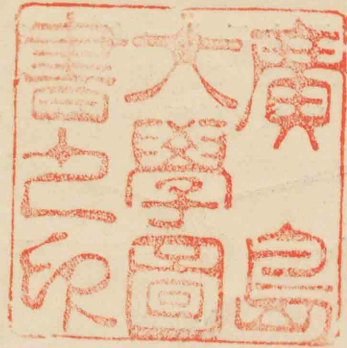


日四十二月一年二正大
濟定檢省部文
書科教科語國校學中

藤村作編

大正讀本

發兌大日本圖書株式會社



大正讀本 卷二目次

一	村上義光	一
二	月三種	七
三	愛犬	九
四	愛犬	一二
五	犬の墓	一七
六	ボアソナード君の歸國を送る	一九
七	繪葉書だより	二二
八	アブラハム、リンカーンの少年時代	二七
九	アブラハム、リンカーンの少年時代	三三

目次

一

一〇	鈴蟲	三	三七
一一	大洲侯に上る書	一	四一
一二	保護鳥	一	四三
一三	ローレライの巖	一	四七
一四	爾靈山攻撃	一	五四
一五	爾靈山攻撃	二	六一
一六	爾靈山	一	六四
一七	加藤清正の大度	一	六七
一八	電氣世界	一	七〇
一九	電氣世界	二	七七
二〇	テセウスの剛勇	三	八一

二一	テセウスの剛勇	四	八六
二二	奇遇	一	九二
二三	酒井忠勝	一	九八
二四	扇の的	一	一〇三
二五	學生日記	一	一〇七
二六	觀兵式	一	一一三
二七	古寫眞	一	一一八
二八	貧窮の利益	一	一二三

(目次終)



大正讀本 卷二

藤村 作編

一 村上義光

「歌書よりも軍書にかなし」と云ひけん、その吉野山にあはれをとめたる武夫の中にも、村上義光の最期最も壯烈なり。

元弘の役官軍敗れて、後醍醐天皇は隱岐に移され給ひぬ。護良親王は叡山より奈良へ落ちのび、般若寺に潜みたまひしが、賊兵五百騎に圍まれ、危き御命を

叡山

經函(口)

辛くも經函の中に拾ひ給ひ、わづか九人の從臣をつれて、熊野の方におち給ふ。村上義光はその九人の中の一人なり。熊野も心もとなく思はれしかば、路を轉じて、十津川の奥に半年ばかりは潜み給ひしが、こゝもうき世の數に漏れざりければ、終に吉野に據り給ふ。

漏る

貞(貝)

賊將二階堂貞藤、大軍を率ゐて來り攻む。親王の兵小勢なれどもよく防ぎ、七日七夜奮闘する程に、敵は辟易し、遠退きて城を圍む。然るに賊に城の案内を知れるものあり。賊軍夜ひそかに城後の金峰山より忍び入り、夜明けを待ちて関の聲をあぐ。城兵必

関

寡迄

死に防ぎ戦へども、衆寡敵せず。今はこれ迄なりとて、腹かき切りて死ぬるもあり、敵とさしちがへて死ぬるもありて、残れる兵はわづかになりけるに、城に火起れり。賊は勢に乗じて突進し來り、親王のおはせる藏王堂にうち入る。親王も是を最期と覺悟し給ひ、二十餘人を從へて、出でて奮闘し給ふ。賊その勢に辟易してひきかへす。親



村上義光

追手
木戸

王藏王堂に入り、幕引廻して最期の用意し給ふ處に、追手にありし村上義光、數條の矢を負ひながら走り入り、一の木戸やぶれ候へば、二の木戸にてくひとめ、戦ひ候ひけれど、宮の御事氣にかゝり候まゝに、返り参りて候。今はこれまでと覺え候。幸に敵も亂れて候へば、今のうちに一方より落ちさせ給へ。臣はこゝに止りて防ぎ申さん。それにつけて、恐多くは候へども、召させ給へる御物具臣に下し賜はば、臣御名をおかしまつりて御命に代り申さん。と申し上ぐ。親王きこしめして、「そはうれしき志なれども、汝一人を残していづくにか行かん。とのたまふ。臣の如き

物具

鎧直垂(ま)

股肱(う)

弔(う)ふ
冥土

ものの一命は言ふに足らず。天下の事かゝりて御身の上に在り。今は命をすて給ふべきにあらず。はやゝ落ちのびさせ給へ。御物具ぬがせ給へかし。と申すに、親王も已むを得ず、鎧直垂までぬぎかへさせ給ひ、「あはれ義光、汝よく聞け。汝はわがために股肱たり。今汝のすゝめに任せて、こゝに別るべし。われ若し生きながらへたらんには、必ず汝の後生を弔ふべし。もしまた敵手にかゝらば、冥土までも同じ途に伴はん。とて涙をぬぐはせ給ふ。「早く「早く」とすゝめまつるに、さらばとて南の方に落ちゆき給へり。

櫓

一品
卿(り)

肌

哉(り)

義光は親王の御物具を身につけて、二の木戸の櫓に上り、親王の御姿見えぬやうになるまで遙に見送り参らせ、大音をあげて、「一品兵部卿護良親王、逆臣の爲にほろぼされ、唯今自害するなり」と呼ばはり、鎧をぬぎて櫓の下に投下し、錦の直垂ばかりになり、肌おしぬぎ、腹十文字にかき切り、腸つかみて櫓の板になげつけ、太刀をくはへて打伏したり。賊はまことに親王の自害し給ひしなりと思ひて、われさきにと圍ときてかけ入る。そのひまに親王は、敵の目をのがれておちのび給ひぬ。

嗚呼、忠なる哉、勇なる哉。「花は櫻木、人は武士。」櫻の

名所の吉野山に、身を以て主に代りし村上義光は、げに日本武士の花なりけり。

(大町桂月)

二月三種

草 笛

笛

あげまき

家路ふかゝるあげまき、
ふえや草笛こゑをみて、
くりの實たつる山うげの、
林の梢つき志返し。

瀧のしぶき

瀧のしぶきにおほはれて、



まどか

岩にせかれてくまられて、
はやきふぐれに浮かべども、

かけまどろかり空乃月。

ふぐれするまに

ふぐれするまに日ほくれて、
池のきざふみ雨はれぬ。

ほげくおばしまつりどのの
いづこに月を見はやさん。

(佐々木信綱)



おばしま
つりどの

三 愛 犬 一

私は生來の朝寢坊だから、毎朝二度三度起されて、不承々に床を離れるが、ポチは朝起だから、もう其の時分には、疾くに朝飯も済んで、一しきり遊んだ所だが、私の聲を聞付けると、何處に居ても、一目散に飛んで来る。

これで私の機嫌も直る。急いで庭へ降りる所を、ポチがすかさず泥足で飛びつく。細い人參程の尻尾を、懸命に掉立てて、嬉しさうに顔を見上げる。見下す。目と目とぴつたりと合ふ。たまらなくなつて、

掉る

頬
汚い

厭ふ

覗く

草履

私が横抱にする。ポチは抱かれながら、身をもがいて、大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、頬を舐め、舐めてもく／＼舐め足りない。考へて見れば、汚いやうではあるが、しかし私は嬉しい。毎朝これでは着物が堪らない。と、母はそれをこぼすけれど、私は着物の汚れを厭つて、ポチの此の志を無にする事は、如何しても出来ない。

ポチも「やつと是で気が済んだ」といふ形で、また庭先をうろ／＼し出して、縁の下などを覗いて見る。と、其處に、草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何かがある。「好い物を見附けた」と言ひさうな面をして、

隙(車)

玄關

それをくはへ出して来て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。すかさず追つかけて行つて、又くはへてポンと抛る。そんなたわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其の隙に私は面を洗ふ。飯を食ふ。それが済むと、此度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で、一番私の苦痛の時だ。ポチが後を追ふ。うつかり出ようものなら、何處迄もく／＼隨いて来て、逐つたつて如何したつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つて居て、其の時分になると、何時の間にか、玄關先へ廻つて待つてゐる

捉まへる

搔く

啼く

る。仕方がなくて、しまひには取捉まへて、否應なしに、格子戸の内へ入れて置いては、出るやうにしてゐたが、然うすると、前足で格子を引搔いて、悲しいく血を吐くやうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しさうな面をして、ばたくと駈出し、聲の聞えない處まで来て、漸くほつとして、普通の歩調になる。而して、いつも心の中で反覆しく、ホチの事を思ふ。

四 愛 犬 二

鐘

じやんくと放課の鐘が鳴る。今まで静かであつ

廊下

昇(目)

た校舎内が、俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が、前後してあわたしく、ばつばつと開く。と、その狭い口から、物の眞黒な塊がどつと廊下へ吐出され、崩れてばらくの子供になり、我勝に昇降口を目がけて、駈出しながら、口々に何だかわめく。只もう、校舎を揺つて、「わーつ」といふ聲の中に、無数の圓い顔が、大きな口を開いて、躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又どたどつと入り亂れて、上を下へと捏返したあげくに、あつと門外へ押出して、東西へ散りくになる。

喚く

仲善し二人、肩に手を掛合つて行く前に、辨當箱をほとんと抛り上げては、ちよいと受けて行く徒者がある。其の隣には、往來の石塊を蹴飛ばし、行く。誰だか「後刻で遊に行くよ」と喚く。「蝗を取りに行かないか」といふ聲もする。「君」と呼ぶ背後で、「馬鹿野郎」と誰かを罵る。「あ痛」「何でい」「わーい」といふ聲が、やゝと入れ違つて、友達は皆道草を食つてゐる中を、私一人は駈脱けるやうにして、側視もせず、切々と歸つて来る。

家の横町の角まで来て、探つたいやうな心持になつて、そつと其の方角を觀る。果して、ポチが門前へ迎

據なし

巫(王) 山戯る

へに出てる。私を見つけるや、逸散に飛んで来て、飛付く舐める。何だか「兄さん」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で、兩手が塞がつてゐなかつたら、私は此の時、ポチをつかまへて、何をしたか分らないが、それが有るばかりで、如何する事も出来ない。據なく、ほとくしながら、頭を撫でて遣るだけで不承して、又歩き出す。ポチも忽ち身をくねらせて、横飛にひよいと飛んで、駈出すかと思ふと、立留つて、私の面を見て、おどけた眼色をする。追付くと又逃げて、又其の眼色をする。かうして巫山戯ながら、一緒にかへる。

我慢

お八つ
煎餅

玄關から、大きな聲で「只今」といひながら、内へ駈込んで、すぐに本包を其處へ抛り出し、あわてて辨當箱を開けて、實は喫べたかつたのを我慢して、半分残して來たのを、今日のお菜の残りと稱してポチに遣る。其でも足りないで、お八つに煎餅を三枚もらつたのを、せびつて五枚にしてもらつて、二枚は喫べて、三枚は又ポチに遣る。

夫から、庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつと「お温習をおし」といふ。このお温習を濟まして、つと外へ出て、「ポチ來い」「ポチ來い」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊に行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けない。

(長谷川二葉亭)

五 犬の墓

地域

或日^{*}ハイドパークの邊を散歩して、^{*}ヴィクトリア門に近いあたりに出た。門守る者の家の後に、狭い地域を占めて、大理石の小さい碑の立並んで居る墓場が見えた。珍しく思つて覗いて見ると、いづれも皆犬の墓である。これはおもしろい、中へ入つて見たいとは思つたが、門が閉ぢてある。折から巡行の巡査に、「彼處の犬の墓地へは、如何したら入られるか」と尋

儘

銘

愛憐

ねると、門番の家に行つて、門錠を叩き給へ。さうすると、門番が出て来て案内してくれる。といった。教へられた儘に、案内を請うて墓地に入った。どの墓も四坪半ばかりの廣さで、それぐに大理石の碑が立つて居る。犬の名や、その生死の年月が彫りつけてあるのは、人の墓石と同じである。中には「ブールドッグ」「狎」などと、その種類を銘したのものもある。「ピートの墓。何年何月何日、無情なる瑞西人の爲に毒殺せらる。忠義なるジョン。などと題したのものもある。飼主が死後の犬に寄せた愛憐の情は、かゝる小さな墓石に見ゆるのみでなく、又これにふさはしく植ゑ

常磐木

文机
倚る

腫る

られた墓前の小常磐木や、手向けられた時を得顔の菊の花にも見えて居て、如何にも床しく思はれ、しばらくは立去るに忍びなかつた。

(歐洲見物)

六 ボアソナード君の歸國を送る

一日、朝早く余はボアソナード君を永田町の家を訪ひたりしに、君は例の如く文机に倚りて、餘念なく法條を起草し居られたるが、其の顔色疲れて常ならず覺えければ、「病やある。」と問ひしに、「病は斯くなむ。とて、其の足を示されたり。見れば、二つの脚共に水色になりて、腫れふとりたり。「何故に靜かに養生し給は

若干

ざるか」と問へば、「司法大臣と約束ありて、某の日までに若干箇條を起草しをへざるべからず。此の義務は病によりて背く能はず」と答へられたり。余且は驚き、且は覺束なく思ひて、急ぎ山田司法大臣邸に至り、此の由を告げけるに、司法大臣も共に驚かれ、即ち秘書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速に轉地療養あらむことを勧められけり。君は約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田舎に轉養せられたり。余は此の時家に歸りて、ひそかに歎息して言へらく、「凡そ司ある人々にして、斯く迄に深き義務心に伴へる勉強を以ていそしみたらむには、立法事業並

秘、療養

當事者

義務心

價値

びに諸般の事の、擧らざる事やあるべき」と。此の事、一小事件なれども、余は將來ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價値ありと信ずるが爲に、別に臨みてこれを公衆の前に述べ。君の二十年間の立法上の功績の如きは、他の諸君の演述に譲りて、こゝに多言せず。

餞

遺憾

辭(辛)

余は實にボアソナード君と二十年來の友なり。場合に依りては我が師なり。さるを、病を以て餞の席に臨むこと能はざるは、是ぞ遺憾の極みなる。今書して君の旅行の安全を祝し、併せて左の辭を以て君を餞す。

記憶

余は君が曾て我が國を呼びて、第二の本國と云へりし事を記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に、君も亦長く第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が、立法上及び諸般の事業に於て、如何に發達するかを見て、幸に余輩の爲に必要なる注意と勸告とを怠ること勿れ。

(井上毅)

七 繪葉書だより

田舎の友より

起き伏せる丘、丘の上なる若木の松林、林の下は一面

たゞずまひ

拙き水彩

眼睛

の薄火をつけたらんが如し。雑木の黄葉、花よりも麗し。夕の雲のたゞずまひは、わが拙き水彩にその萬分一をあらはせど、秋の景色の眼睛ともいふべき百舌鳥の鋭き鳴く音は、到底畫中に入るべからず。

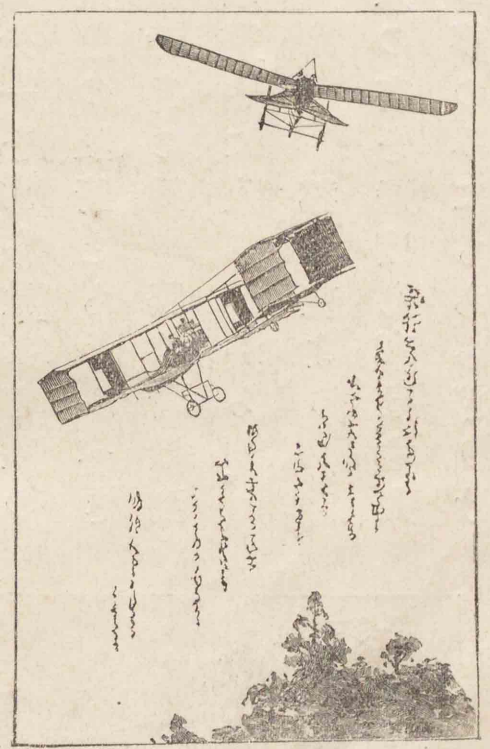
都の友より

人の空を飛ばん事は、古人の夢のみにもあらざりけ



翼

翔(羽)る
爽(多)快



るよ。見給へ、
下なるは雄風
堂々、大鵬の翼
を張りたらん
が如し。フア
ールマン式よ。
上なるは輕快

隼鷹の翔るに似たり。ブレリオ式なり。所澤の空
なるプロペラの爽快なるうなりは、そゞるにわが智
識上の功名心をそゞる。
田舎の友たちより

鳩

翅(羽)



今日快晴に乗じてわれ
等五人此處に散策す。
甲某

沼上風なく波なく、鳩の
群水面をうつつて東に飛
ぶ。
乙某

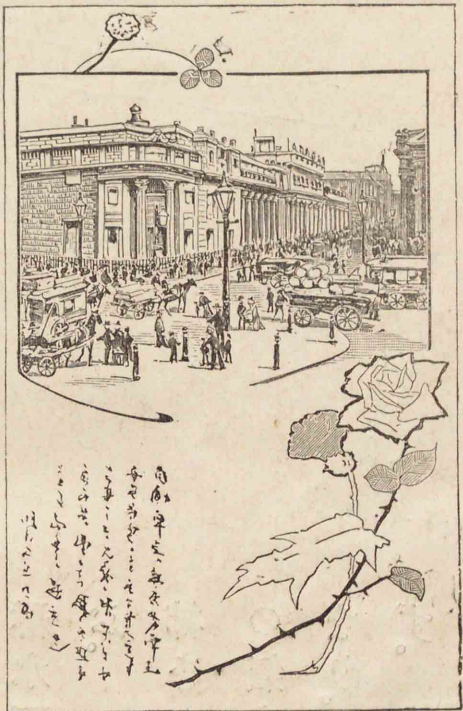
柿をかじりつゝ、甲君例
の氣を吐くことしきり
なり。面を向くべから
ず。
丙某
翅弱げに飛ぶ死残りの

吟

健康

厦

雜沓(水)



蝶に感じて、乙君
今苦吟最中なり。
丁某

遙に君が健康を
祝す。 戊某

都の友より
自動車走り、電車
行き、馬車かける。

十幾層の大厦軒を並べ、幾百千の人左往右往、東奔西走す。いふまでもなく世界最雜沓の街路なり。活動、活動、活動は都會の花にして、又文明人の生命なり。

熱鬧圈

り。吾人の將來の天地は、まさにこの熱鬧圈中にあり。

八 アブラハム、リンカーンの少年時代 一

豪傑 稀有

完全無缺の人物は、古往今來、決してありません。しかし、完全に近い人物を求めたならば、アブラハム、リンカーンの如きは、實にその一人でありませう。英雄・豪傑は必ずしも得難くはありますが、完全に近い人物は、眞に稀有のものであります。リンカーンは、北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その徳は萬世に

澤 聊 追慕

輝き、その澤は四海に溢るゝ人であります。私は今此の大人物の少年時代の話をして、聊か、追慕の意を表したいと思ひます。斯かる大人物も、其の生まれは極めて賤しく、生まれたる處すら、唯ケンタッキー州中、當時ハルデンと稱へられたる片田舎のノールン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても残りません。彼の兩親は極めて貧しく、家と稱するほどの住居もなく、丸木の小屋に住んで居りました。この丸木小屋こそ、實に、千古の大人物アブラハム、リンカーンが、呱呱の聲を擧げた處であります。時は西曆一千八百九年二月十二日、春

呱呱

綻ぶ

洗濯

斧(斤) 開墾 鍬、寸毫

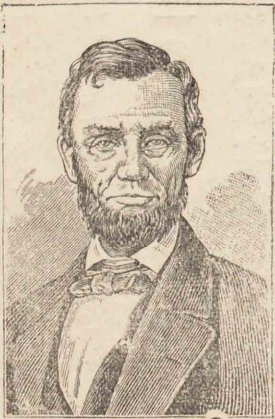
雪正にとけて、梅花綻ぶる時節の事であります。父は憐むべき日雇で、日々他人の田圃に勞役し、母は炊事、裁縫一切の家事を勤むる外に、他家に洗濯に雇はれたり、近傍の森や林に薪を拾うたりして、其の日其の日のかすかな煙を立てて居りました。リンカーンは、七歳の時から、父に随つて森に行つては、小さい腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出ては、鍬を執つて耕作の手助をもして、十年餘り、寸毫の暇もなく、營々として労働を續けました。斯かる貧苦の間にも、常に彼を教へ彼を勵まして、他日大成の基を作つてくれた人がありました。それ

は誰でもありません、彼の母親でありました。この母親は、素性の賤しきに似ず、至つて賢明な婦人で、常に、人間の價値は、その身の富貴貧賤によつて定まるものでなく、その精神の如何によるものであることを教へました。そして、卿を學校に入れて、學問をさせたいは山々であるが、今の貧乏では、それもかなはん。せめては、母が覺えた一通りを教ふるほどに、農事の暇に、精出して勉強せよ。と懇ろに言ひきかせて、第一に習字、次ぎに讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へましたが、不幸にも、リンカーンが十歳の時、朝露に先だつて、脆くもあへ

懇

脆し

なくなりました。彼は天を仰ぎ地に俯して歎き悲しみましたが、今は致方もないので、父と泣くく、野邊の送りを營みました。



父はもとより、日々の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つた心地。

「せめて一年半年なりとも、小學校に通ひたい」と切りに父に訴へましたので、父も餘りの不便さに、遂に之を許しました。リンカーンは、天にも昇る心地で、日々九英里餘の路をも厭はず、一回の缺席もしな

訴ふ

赤貧

いで、田舎の一小學校に通ひましたが、哀にも赤貧の爲に、僅々九ヶ月にして、復廢學せねばならん事になりました。あゝ、この九ヶ月こそ、彼が前にも、後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體であります。これより、彼は日々鋤を執つて、田圃に働く身となりましたが、或は種を播き、或は草を刈る傍には、毎に二三の書卷の横たはるを見るのであります。その書は、綴字書、算術書、文法書の三種でありました。彼の性の伶俐なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇々に、露天の下で、教師もなくて、よく其の意義を解くことを得ました。斯くて、朝には此等の書を携へて出

播く

綴

伶俐

露天

で、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、三書の一章一句も残さず、悉く暗記するに至りました。

九 アブラハム、リンカーンの少年時代 二

十三四歳の頃、彼は隣家にかねてその名を聞いてその功業を敬慕せる、ジョージ・ウオシントンの傳記を藏することを知り、欲しいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがして居ましたが、一日、遂に思ひ切つて、その借覽を請ひました。處が幸に、其の人は快く貸してくれました。リンカーンは鬼の首でも

雀躍

丁寧

濡る

後の祭

兎(九)

取つた心地で、雀躍して家にかへり、折角苦心して借り得たものと思ひ、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にもその夜大風雨があつて、彼が爲に一大事が起りました。彼が驚き覺めて、借りた本の事を思ひ出し、濡らしては一大事と、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さんぐになつて居ますので、大聲あげて泣きましました。小兒心に心配して、其の夜は終夜眠られませんでした。翌朝、兎や角と案じましたが、正直に次第を述べ、罪を謝する外はないと決心して、濡れ破れてペーシもわからぬ書を捧げて、隣家に行き、泣いてわびを

耽

體得

廁

洩る

竊

し、其のかほりに、二日でも三日でも、勞役をさして下さい。と頼みましたので、貸主もその心を察して、別段に之を尤めず、その意に任せました。そこで、彼はウオシントン傳を携へて家に歸り、濡れたペーシを分け、丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀しました。以來、讀過數十遍、この大人物の品性、事業に感化せられて、遂には彼を體得するに至りました。又、彼が一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅客がその家に宿つたことがあります。深更に廁に行つて、ふと、庭の木立を洩れてさし來る燈火の光を見つきました。はて不思議と、竊に行つて見れば、思ひ

がけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に書見をして居ります。旅客はこの意外の光景に、ひどく驚いたが、その夜はそのまゝわが室にかへり、翌朝家の主人にこの事を聞きました所が、主人も「彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を讀み、夜も夜業が終れば、更くるまで勉強し、わからん事があれば、人に質し、學問を此の上なき樂しみとし、温順しい、謙遜な、そして正直によく働く、才智もあれば、情愛もある、まことに末頼もしい少年である。」と答へたといふ事でありませう。この少年こそ、言ふまでもなくリンカーンその人でありました。

更く

謙遜

諸君は、我が國近世の偉人、二宮尊徳の少年時代の學を知つて居られませう。貧家に育つても、よく勉強の功を積んで、大成せる東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす。リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として、萬人に仰がるゝに至つたのも、實に此の少年時代、貧窮の經驗から得た教訓の賜であると思はれます。

貧窮

玉にす

(阿ブラハム、倫コロンに據る)

一〇 鈴 蟲

鈴蟲は漢名を金鐘兒、又、月鈴兒と云ふ。コホロギ科

愛玩

に屬する小さき蟲にして、人の愛玩する所なり。和名はもと松蟲と云ひしを、今は鈴蟲と呼び慣らはせり。

概

體は概して、雄は雌より大きく、身長四分位あり。全體漆黒色を呈し、頭胸部には、微細なる一面のくぼみあり。頭部は小さくして尻大きく、觸角は長くして絲状をなし、中央は灰白色を呈す。翅は、雄に在りては、其の表面に著明なる凸凹の紋あり、雌に在りては退化しゆく形跡あり。その腹部は、黒み勝の黄白色を呈し、肢は黒褐色、尾狀突起は、長さ三分許、暗桃色を帯びたり。眞黒の姿、光ある美しき眼、臆病らしき振舞、性

凸凹
退化

臆病
肢

餘韻

は何ぞ。と問ふ人あらば、余は「女性」と答へんと欲す。鳴き聲は、リリリン、くくと聞え、また、リーン、く、リんとも聞きなざる。餘韻は短からねど、最後にリんと鳴止むる時、節を廻して、捨つるやうに調子を下ぐるは、聞きて快く、可愛らし。との感想を起さしむ。或人の歌に

玉ならば袖に包みておくらばや、

わが住む野邊の鈴蟲の聲。

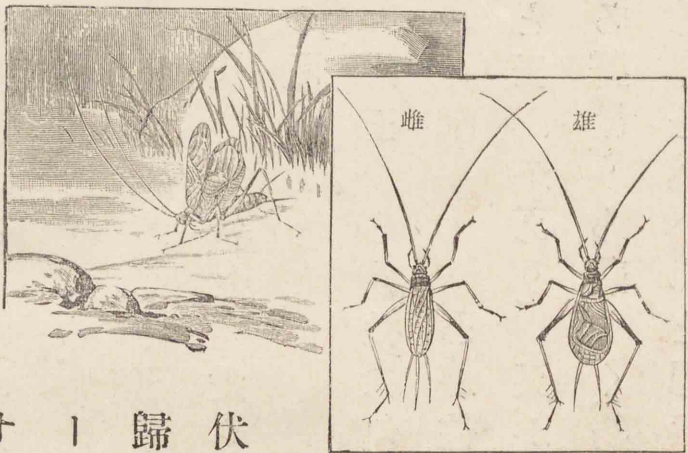
と云ふがあり。又、かよわく、露にだに堪へぬやうなる聲は、うら悲しく、物寂しくもあり。

鈴蟲を捕へんと思は、野邊に行き、林に入りて、その

踏む
すは

檐端

胡瓜



聲を聞きつけ、聲をたよりに静かに近づきて、穴を見つけ、さてその側を踏むべし。足音に驚かされて、すは事こそ起りたれ」と、あわたゞしくも穴を出で来る。そを手もて伏せ、紙袋・竹籠などに入れて持ち歸らば、その夜より、檐端・枕許にリン、く、リンと美しき音楽を奏すべし。

鈴蟲の最好物は、砂糖なり。籠に入れて飼ふに、胡瓜

心耳
澄む

罷在

のわたを入れ置けば、機嫌悪しげにうたはねど、玉砂糖を與ふれば、やがて樂しげに歌ふを例とす。鈴蟲の聲の殊に美とせらるゝは、所謂「月明星稀」の夜なり。空は晴れ、大氣は少しく冷を帯び、夜露しつとり下りて、草葉に月光を宿せる時、草むらといはず、木の間といはず、涼しき、清き、優しき聲に、リン、く、リンと鳴くを聞かば、心耳も、澄渡りて、六根の清淨となるを覺ゆべし。

(鳴く蟲の研究に據る)

一 大洲侯に上る書

われ等老母一人江州に罷在候母子相離れ候うては

有免

庸儒

叔

養育心に任せず候故文にて申遣し候へば返事に婦人は境を越えずと申越し其の國を出づべき氣色なく候親一人子一人のことに候へば某を頼みたよりに致し罷在候處にかやうに國を隔て親を他國に捨て置き候こと道ならず存候ゆゑしきりに御暇の儀願ひ候へども御宥免なければ力及ばず只今立退き申候然れば不忠の者と思召さるべく候へどもつらく忠と孝との二つをくらべ候に君は祿を以て御招き候へばわれ等ごとき庸儒はいか程も御家に集り申すべく候叔又老母は某に離れ候うては他に頼むべき者御座なく候されば忠孝の二つをわきまへ

了(了)簡

見申すに孝は重くして忠は輕し我等儀は重き方へ心ざし輕きを捨てて立退き申すものなり斯様に御家を出でて重ねて二君に仕ふべき心底これなく候此の段聞こしめしつけられずして不届に思しめされ候はば如何とも仰せ付けらるべく候少しも御恨に存じ奉らず候道の重きにひかさされ罷出候へばかりそめに御厚恩を忘れ申候に似たれども天命の至極に於ては愚夫の了簡この上に及びがたくかくの如くに御座候 以上

(中江藤樹)

一二 保護鳥

施行

農政

患害

莫大

我が現行の狩獵法施行規則は、保護鳥として、益鳥類七十五種の多數の捕獵を禁止せり。これ我が農政上、眞に必要な事なり。

凡そ農作の患害は、風水によるよりも、蟲類によること多く、僅かに寸にも足らぬ小蟲の身を以て、わが國民の生産を害ふこと、年々一億圓の上に出づと聞く。故に政府は、害蟲驅除費として、毎年莫大の國用を支出し、全國に技師を派遣して、これが豫防撲滅をはかれども、彼等の繁殖力の猛烈なる、未だ十分なる實績を認め難し。

然るに、こゝにこれ等の害蟲を捕食して、自然に農家

就中

囓る

棲む

平均
滞在

の身方となるものあり。就中、多くの鳥類は、林中に蟲卵をあさり、耕圃に小蟲を求め、樹皮草葉の裡に潜む物すら、殆ど遺す所なし。

秋林に群飛して、巧みに囓る四十雀と呼ぶ小鳥は、一年よく二十四萬の蟲卵を食ふと云ふ。されば、假に一山十羽の四十雀棲むとせば、一年約二百萬の蟲卵を滅すべし。二百萬の蟲卵、もし悉くかへるとせば、満山一青を留めざるに至らん。

春の陽氣とともに南洋より來り、秋の涼風に伴ひて、再び南洋に歸る燕は、滞在中、一日平均五百の蟲をその食に充つ。されば、その日數を假に百六十日と見

雛
食慾

積らば、一羽優に九萬の蟲を捕獲するなり。
殊に鳥類が一年三回、其の子を養育する際は、最も多
く蟲類を要する時なり。雛は食慾の旺盛なること、
殆ど親鳥に倍するが故に、彼等が實際に捕獲する蟲
數は、この平均數より多からざるべからず。かゝれ
ば歐米の先進國が、鳥類保護協會を設けて、盛に此等
の益鳥を保護せるは、もとより其の所なり。然るに
わが國にありては、禁令を發すれども、民間往々之を
捕獲し、卵雛を兒童の玩弄に委して怪しまざるもの
あり。有害なるは之を驅除し、有益なるは之を保護
して、其の利の及ぶ範圍を、廣く且大ならしむるは、國

先進國

玩弄(カ)

雷

啄む

式駿

民の義務にして、これ雷に農家の慶福を増すのみに
あらざるなり。
今や林に、田に、園に、これ等の保護鳥は夥しく飛交ひ
轉りつゝ、蟲卵をあさり幼蟲を啄めり。これ等の可
憐なる珍客をして愉快なる生活をなさしむるは、當
にわれ等の義務なるべし。
(少年諸子に據る)

一三 ローレライの巖

オバーウエゼルを過ぎると、川は大屈曲をなして、一
大奇勝を形作り、夢寐にもあこがれたローレライの
巖は、眼前に現れた。萊茵に遊ぶ者で、此の巖を見ず

峻峭

蒼

曉

して歸る事があれば、家人は其の人を家に入れまいとまで云はれて居るのがこれである。灰色の峻峭な巖山が、河の東岸に聳えて居るのを見上げて、船客みな「ローレライの巖だ」と口々にいふ。

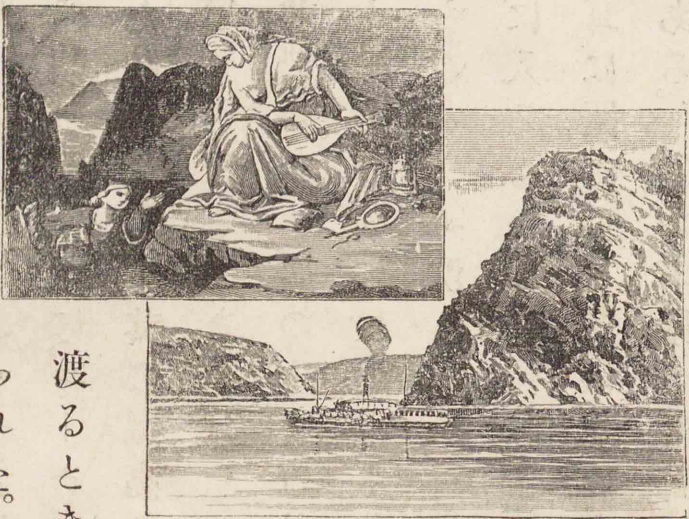
昔、日くれて、蒼白い月影が萊因の流を照らした折々、此の巖頭に、夢のやうな柔かな歌の聲が聞えて、やがて現るゝ神女の美しさ。行きかふ船人が、心もそらに其の姿に見とれてゐる間に、あだ浪忽ち起つて、その船を沈めて仕舞ふ。斯くて何人も、此の神女に近づくことが出来なかつた。そして夜毎々々柔かな低い歌聲は、斷續して霧立ちこめた曉に及んだ。

噂

究竟(立)

黄昏(日)

互ゆ



此の地方のさる大名の若殿に、ローナルドといふ勇士があつた。此の噂をつたへ聞いて、ある日狩獵に託して、究竟なる老船頭を雇ひ、輕舟に乗じて此の巖へと向つた。黄昏いつしか谷を包んで、日は彼方の山の端に沈み、静かな夜の色の中に、空の星影の互え渡るとき、舟は此の巖下に漕ぎつけられた。彼は瞬もせず巖上を見つ

飄る

めてゐる。「ローレライ、神女の姿」とさ、やく低い老船頭の聲と共に、ローナルドが眼にあり／＼と映じた神女の影。其の氣高さと、其の美しさと、丈にも餘る金髪、風に飄る白き袴。

若殿の魂は、巖の上なる神女の胸に飛入つたかのやう。彼の前には巖壁も無ければ、彼の下には流水もない。たゞ沈々たる月夜は、おぼろに霞んで、彼の目に入るものは、只笑を含める神女の姿である。彼の耳に聞えるものは、その名を囁くやうな神女の聲である。忽ち若殿の叫聲は巖に響いて、その姿は激流に消えて、行方も知れずなつた。

囁く

驚愕
譬ふ

此の時雲間を破つて閃く電光、耳をつん裂く雷鳴に、老船頭は少時茫然として自失したが、漸く我に歸れば、天は忽ち晴れて、巖が根に打寄する浪の音に、ローレライの歌聲が響きあつて居た。

此の報を得た父君の驚愕、悲歎、憤怒は、譬ふるにもなかつた。巖命一下、勇敢な青年數人は、直ちに派遣せられた。早船は矢の如く萊因の流を下つて、此のローレライの巖へと近づいた。巨人の如く立てる斷巖が、刻々に暮色に包まれ去る時、一隊は勇を鼓して登り行く。巖頭に映ずる夕陽の影かと見たのは、常の如く金髪を風にそよがせて姿を現せる神女

鎖 嘲る

唇

の光明であつた。

神女はやがて、胸なる眞珠の鎖を解いて、其の額に捲き、一隊の勇士を嘲るが如く一瞥した。「地上の弱き青年等よ、卿等はこゝに何を求めんとて來れるか」と神女の唇は動く。「汝悪魔よ、われ等は汝を水底に突きおとさんがために來る。」と隊長は怒の聲高く叫びつゝ、どつと笑へば、反響は山のおなたにまたどつと笑ふ。

「嗚呼、萊因の河は、今わらはを召す」と、神女は巖頭に立上り、谷底を望みつゝ、眞珠を執つて水中に投げすて、低い清らかな調で歌ふ。

みまし

懐しき父上よ、急ぎたまへ、萊因の清き流より

急ぎ駿馬を送りたまへ。

浪よ立て、風よ吹け、此の立つ浪と吹く風と

わらははみましの許に行かん。

歌終れば、一陣の暴風起つて、川浪にはかに岸を覆ひ、二條の波濤、雪より白き駿馬の如く、水底より立上るよと見る間に、神女を包んで激流の中に没して仕舞つた。

この時から、ローレライの神女は、絶えて其の美はしい姿を現さない。只夜色沈々として、蒼白き月影が深緑の水面を照らすとき、此の巖下を過ぐる舟人は、

描く

かすかな調で歌ふやうな聲を聞くといふ事である。嗚呼、ローレライの神女は、この地を去つて仕舞つたが、詩人に歌はれ、名畫に描かれて、世界の人の胸に今も残つて居る。天下の好山水は、必ずしも萊因に限らないが、この神話に依つて、その山水の風光は、永く人の感歎を深うして居る。

(黑板勝美)

神話

爾(交)

一四 爾靈山攻撃 一

今や第三回總攻撃が開始される事となつた。而してその事實にあらはれた第一の計畫は、松樹山砲臺を突破り、旅順要塞を兩斷する目的を以て行はれた

禱

部署

白禱隊の突撃である。この突撃は二十六日の夜半に、海鼠山の麓から、松樹山の補備砲臺に向つて行はれたが、一隊殆ど全滅し、累々たる死屍を遺して退却するの已むを得ざるに至つた。そこで第二の計畫たる爾靈山の攻撃となつたのである。蓋し爾靈山は、旅順口内の全部が視通される重要な位置で、これが我が軍の手に入つたならば、其の他の堡壘ほらは、とても支へる事の出来ない程の要害である。是よりさき、攻撃部署が定められて、爾靈山の攻撃には、後備旅團と我が歩兵第一聯隊とが當る事になつて居た。二十七日午前十一時、聯隊本部は、海鼠山の

對濠作業

据う

頂に移り、砲撃の結果を視察すると共に、爾靈山に向ふ對濠作業を進める事になつた。二十七日午後一時頃から、展盤溝てんぱんこうに据ゑつけてあつた我が二十八珊榴彈砲は、爾靈山と赤阪山とに向つて、砲撃を始めた。海鼠山と爾靈山との距離は、約五百米突、赤阪山とは僅か二三百米突であるから、その破裂の光景は、手にとるやりに見える。巨弾が轟々と空を切つて飛ぶ音、黒線を描いて敵壘に落ちるさま、それが爆發して倒圓錐形の火燄を噴き、岩石を飛ばし、敵兵を空高く吹上げるすさまじさ、言語に盡くされんとは、この光景であらう。午後二時、わが聯隊は今夜六時を期し

火燄

活劇 征衣



吹いて、黄昏の色漸く天地をこめ始めた十一月廿七

て、爾靈山及び赤阪山を攻撃すべき旅團命令に接した。そこで、第三大隊は爾靈山の攻撃に當り、第二大隊は赤阪山に向ひ、聯隊豫備としては、第一大隊を残すことに配置がきまつて、愈驚天動地の活劇が始まらうとして居る。時は北風そら寒く征衣を

攀づ

あはや

日の午後六時。正に所定の突撃時機は來た。兩突撃隊は、爾靈山と赤阪山に向つて、一舉に山を攀上り、鐵條網の一部を破つて、そこから突進しようとしたが、兩側の敵は、猛烈な射撃を浴びせかけるので、散兵濠は忽ち屍の山を築いて、折角占領した陣地も、あはや敵に取返されさうである。これを見た豫備隊は、猛然續いて進入したが、敵の射撃は少しも衰へず、進む者も進む者も、次ぎ次ぎに斃れ、幹部が全滅して、最早進むべき手段がないので、攻撃隊は鐵條網下の岩石の下まで退き、攻撃準備陣地を作つて、こゝに潜み、聯隊本部は、爾靈山の麓に進んで夜明を待つた。

沙烟

零

視察

囊(口)

明くれば二十八日、天は陰晴定まりなく、強風沙烟を吹きまくり、寒暖計は攝氏零下八度を示して居る。早朝から副官は赤阪山に、聯隊長は爾靈山に、各、戦況視察に出かけられるので、自分は副官代理として、聯隊長に随つて出た。時は午前八時、聯隊長は愈々突撃の決心をして、軍旗を捧持して來い。といはれるので、早速立歸つて軍旗を捧げ、從卒と僅かの旗護兵とを随へて、聯隊長の後を追うて急いだ。此の時聯隊長は、はや突撃陣地を乗越え、二三俵積上げた土囊の陰に身を寄せ、軍刀を抜いて「旗手」「旗手」と呼んで居られる。其の聲が何時もに似ず低いので、驚いて馳付け

襟
掴む

て見ると、機關銃弾が雨の如く落下する中に、隊長は重傷を負うて居られるのである。自分は旗護兵を踏臺にして其の脊に乗り、聯隊長の襟を掴んで對濠内に引入れたが、隊長は見る／＼顔の色蒼ざめ、傷口を眺めながら、

成功を見ずに戰場を去るのが残念だ。

といふ言葉を残して後送された。そこで、第一大隊長は、聯隊長代理となり、正午を期して再び突撃を行つたが、敵の小銃・機關銃弾は、雨霰の如く降りかゝつて、中腹に達しない中に、一隊悉く斃れてしまつた。

一五 爾靈山攻撃 二

あゝ、爾靈山は竟に落ちないのであらうか。併しながら、旅順口を落さうとすれば、爾靈山を奪はなければならん。一人たりとも人間のある限りは、爾靈山に向つて突撃せねばならん。

午後零時三十分、總突撃の命令の下に、高崎聯隊の一中隊は突撃した。彼等は伏屍をのりこえ、彈雨を潜つて突進し、山の中腹に潜んで居た我が第三大隊の生殘兵若干と協力し、雨の如き敵彈の下をくゞつて、幸にも敵の散兵濠に肉薄したが、胸壁は高くて攀登

肉薄

る術もなく、辛うじて、その蔭に身を寄せて弾を避けた。同時に、豫備隊たる第三中隊も、攻撃隊に加つた。午後五時、新來の第七師團第二十六聯隊の第一大隊は、我が聯隊長の指揮する所となつて、二箇中隊は爾靈山に、他の二箇中隊は赤阪山に増加せられた。新來の兵を得て、我が軍の士氣漸く振ひ、午後八時には、辛くも、山頂敵壘の左半部を占領するに至つた。聯隊本部は、爾靈山頂に移された。併し、猛烈な逆襲があるに違ないから、警戒をさくく怠なく、我が聯隊は防禦工事にかゝり、第二十六聯隊の兵は、到着したばかりであるから、中腹敵壘の線にあつて、敵襲に備

へて居る。果して「ウラー」「ウラー」の聲は物凄く起つて、あやめもわかぬ暗の中に、銃火閃々と輝き、見るまに死傷者が續々と出來て、幹部は聯隊長以下、將校一人も残らず斃れたので、旅團は全く攻撃力を失ひ、一時攻撃を中止した。

あゝ、我が聯隊は、今や全滅に歸した。南山以來、幾回かの戦闘に、忠勇なる我が將卒の血は、惜しげもなく半島の土に濺がれて、幾回かの補充兵も、次ぎから次ぎと死んでしまつた。かくて爾靈山攻撃は、遂に第七師團の擔任となつたのである。是から毎日毎夜肉彈の投合ひを續けて、流石、頑強な敵も、とう／＼辟

濺ぐ
擔任
肉彈
頑強

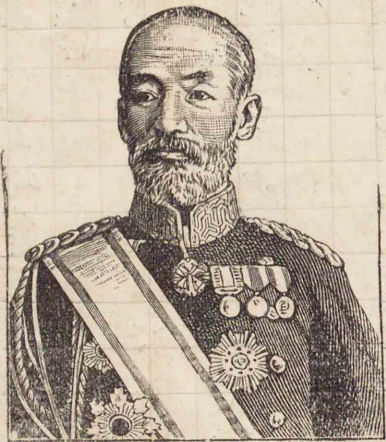
易した。十二月六日の朝七時は、實に六千萬同胞の記念すべき時である。爾靈山頂、仰ぐもなつかしい旭旗のひらめいたのは、この時である。
(鐵血に據る)

一六 爾靈山

互る

謹啓二〇三高地の戦争は十一月廿七日より十二月六日に至る全九晝夜に互り敵味方五回取りて五回取返され遂に六回目には確實に占領せしものにこれあり候その劇烈慘憺にして一小地點に於て敵味方殆ど二萬の死傷を數ふるに至りたるは上下五千載を通じて東西の歴史に全く比類を見ざる所にこれ

膾炙



有り随つて其の間には如何に成行くならんかと氣遣ひたる節もこれ有り候ひき。戦争後同高地に登れば落下せし彈丸は小石の如く歩々靴のジャリジャリ音することにて當時激戦の狀を御推察下されたく候。叔此の如き大記念の戦蹟なるに拘らず全くの無名にて海面よりの高さに依り單に二〇三と呼ぶは少々物足らぬ様人も我も考へ居り候然ればとて二〇三の名稱は既に世の人口にも膾炙し來り候のみならず血に

傲す

爾靈山嶺山皇
 塗れて今や氣息絶えんとする兵士
 が二〇三はまだ取れませんか」と問
 男子四名期
 克艱
 鏖空覆山
 形改
 吾人齊仰爾
 靈山
 乞
 乞
 音二〇三にも相通じ最も恰好と存候に付爾後日本
 國民は大將が名譽の記念として爾靈山と稱せんこ
 然る上は大將の大功績の山にもこ
 れあり候へば爾靈山と呼傲せば國
 存致したくと存居候。折柄唯今乃木
 大將より別紙の如き詩を送られ候

勿

と希望に堪へず候 勿々拜具

昂(目)

十二月十日

志賀重昂

(大役小志)

大度

一七 加藤清正の大度

加藤清正一日放鷹に出づ。木蔭より誰とも知らぬ
 大の男走り出で、刀を抜きて駕籠の真中を突通す。
 清正昨宵の酒に草臥れ、後に寄り掛りて微睡し居た
 りしかば、身に當らず。駕籠側の者驚きて、右の男を
 搦む。清正駕籠を据ゑさせて、何者なれば。狼藉な
 り。と尋ねしに、某は所もなく、苗字もなく、親も子もな

駕籠

宵、微睡

搦む
狼藉

糺す
棄(ホ)つ

く、國右衛門と申す者なり。」と答ふ。仔細を厳しく糺すに、元來棄子にて人となりし故、親兄弟も知り候はず。たゞ一門加藤清正のために亡されたり。」と聞き傳ふるばかりなり。然れば一度清正を討つて仇を報ぜん、と年來狙ひ廻れども、御威勢に壓されて、空しく月日を送れり。此の節を幸に一太刀と思ひ込みけれども、御運に負けて、本意を遂げず。無念千萬、言語道斷なり。早々首を刎ねらるべし。」といふ。清正聞いて、「天晴、肝に毛の生えたる曲者かな。汝が一命を助くべし。一念を翻し、清正が家來になれ。」と言ふ。國右衛門曰く、「忝き仰なれども、御請罷成らず候。其

壓(ホ)す

言語道斷

勿ぬ

肝曲者

忝(心)し

必

必定

卑(十)怯

舊染

の故は、一旦御恩を存じ、御奉公仕るとも、數年存じ込んだる念力なれば、逆心を存すべきは必定に候。然れば早く死を賜はれ。」と望む。其の時、清正大音あげ、兩眼に角を立て、「己、今までは大剛の者と思ひしに、卑怯千萬の臆病者なり。」と叱りければ、國右衛門切齒をなし、「臆病とは是非なきこと。」と立上る。清正、汝、最前一命を棄てずや。實に一命を棄てたらば、舊染の念は残すべからず。棄てざる所を臆病とは言ふなり。といひし時、國右衛門落涙し、「有難き御一言に、忽ち一念晴れ候。御家來に罷成り、御恩を報ずべし。」といふ。清正喜び、駕籠より下り、「是より徒歩にて行くべし。」

腰の物

國右衛門刀持て。と腰の物を渡し、終日放鷹し、其の後彌側を離さず、段々祿を與へ、懇ろに召使ふ。國右衛門其の恩に感ず、蔚山の城にて勇ましき戦死を遂げけり。

(名將言行録)

一八 電氣世界 一

平兼盛は天曆時代の歌人なり。嘗て、東に下り、今の磐城の白河に到りて、

たよりあらばいかで都へ告げやらん、

けふしらかはの關は越えぬと。

と詠じ、世人傳へて是を稱せり。元祿の碩學契沖阿

碩學

擴む

闇梨兼盛が歌の心を擴めて、更に旅の歌を作りていへらく、

越えぬとて都に告げしたよりだに

聞え聞えず白河のせき。

偶 げにや、江戸時代に至りても、京都奥州間の飛脚便は、一年數回に過ぎず。偶幸便に託して消息を通ずれば、音信或は達し、或は達せず。古人が故郷を懷ひ、親族朋友を戀ふることの切なる、眞に察するに堪へたり。然れども、今や電信全國に通じ、夜白河に入る者直ちに一葉の頼信紙を電信局に投ずれば、デジニツイタの報知、即夜京都に至り、東西千里の人をして、忽

即夜

戀ふ

偶

運搬

一斑(文)

ちに心安く、夢穩かならしむ。

此の如く古今苦樂を異にして、殆ど別世界の思あらしむるは、電氣の力にあらずや。

電氣は應用甚だ廣くして、通信に、運搬に、醫術に、工業に、日用に、學術に、世を益し人を利する事、廣大無邊なり。

十九世紀の文明、半ばは電氣の力に頼ると稱せられしが、時既に二十世紀に入りて、電氣の領域、益、廣まり益、繁榮せんとす。今、電氣世界の一斑を語らんか。我が國、維新以後、西洋の事物を輸入すること盛にして、電信は最も早く東京に架設せられ、延いて地方に

至れり。其の初、田舎の人、未だ電信の何物たるを知らず、在京の子どもに衣服を送るとて、包に荷札を附けて、電信線に懸け置きし話などありき。今は、三尺の童兒も、電信の書式を知り、商人はこれによりて、坐ながらにして全國商品の相場を知り、一瞬の間に、千里の外と賣買の約定をなし、氣象臺はこれによりて、全國日々の天候を豫報して、航海者及び農業家の災害を少くす。

然れども、電信は符號を通ずる者にして、一語を送るにも、相應の手續を要し、長文の通信に便ならず。近頃、電話の發明ありしより、談話をそのまゝ通じ得る

連絡

喧し

丁稚
喧嘩

雲泥の差

に至り、長距離電話は、既に東京・大阪より九州を連絡し、數百里を隔てて、「もしく、あなたほどなた」さやりなら、の應答喧しく、時としては、長崎の番頭と東京の丁稚と、喧嘩口論をなすことあり。「聞え聞えず」の昔に比すれば、實に天地雲泥の差といふべし。

櫛
挽く

電話はまた日露戦争に、大なる効力を示せり。元は、總司令部より指揮を諸隊に傳へ、或は諸隊の報告を受くるに、傳騎の往復櫛の齒を挽くが如く、其の混雜一方ならず、而も傳騎の中途に斃れ、或は機に後る者多くして、不便甚だしかりき。日露戦争において、我が滿洲軍總司令部は、全軍の指揮に最も便利な

靜肅（驚き）

る一地點を占め、各方面に電話線を引くこと、恰も首腦より神經の分布するが如く、指揮官は各方面の報告を參考して、諸隊の部署を定め、號令を下すに、戰線數十里の間、さながら手足を使ふが如く、觀戰の外國武官、皆其の靜肅にして敏活なるに驚きき。

近年の發明に、無線電信といふものあり。こは電氣の火花より起りたる電波を、反射鏡様の金屬板にて遠方に送ること、恰も光線を反射鏡にて送るが如くし、以て彼方の受信機に感ぜしむるなり。此の機械は電線を要せざる便利ありて、燈臺・軍艦、或は潮流急激にして、海底電線を沈設し難き海峡等に用ひらる。

偵察

日露戦争の時、旅順口封鎖船は、斷えず無線電信を以て、敵艦の動靜を本隊に報じ、攻撃の機を失はざらしめたり。日本海海戦の日は、濛氣深くして、遠望に不便なりしかども、偵察の諸艦が、時々刻々敵の行動を報ずるを以て、我が東郷大將は、數十海里の外に在りて、敵の陣形、速力、針路等を、手に取る如く知られたりき。是皆無線電信の賜ものなり。

然れども、無線電信も、亦符號を通ずる者なれば、通常電信の如き不便なきに非ず。故に無線電話の考案をなす人、近來少からざりしが、日露講和の翌年、奧國人これを發明し、同時に、我が海軍技師、亦これに成功

考案

せり。但し、其の構造は、今猶軍事の祕密に屬し、世に知らるゝに至らず。

一九 電氣世界 二

車輛

電車は強力なる電氣を電線に送り、これによりて車輛を鐵道上に運轉せしむる者なり。我が國にて始めてこれを設けたるは、京都なり。近年は東京市内にも、盛に運轉して、大いに交通の便を助く。但し、これらはいづれも短距離の用に過ぎざるが、近頃は京濱間、又は阪神間等の、稍長距離なる處に用ひ、其の賃金低廉にして、便利なるを以て、殆ど汽車と競争する

稍

勢あり。

電氣機械の中にて、最も民間に親しきは、電燈なるべし。三府は言ふに及ばず、今は多くの都市に電燈會社ありて、軒竝の電燈、皎々として晝よりも明らかに、而も、石油燈の如き危険なし。電燈の装置は、誰も見知れる如く、重に空氣を抜きたる玻璃球の中に、炭線をわがねたるものにして、電氣これに通ずれば、炭線白熱して光を放つなり。

醫療上には、豆粒ほどなる小電燈ありて、喉頭又は耳の中を照らし見るべく、胃の如き奥深き處をも窺ふべし。又或は電氣を以て白金線を白熱して、腫物を

皎々

玻璃球

粒

窺ふ

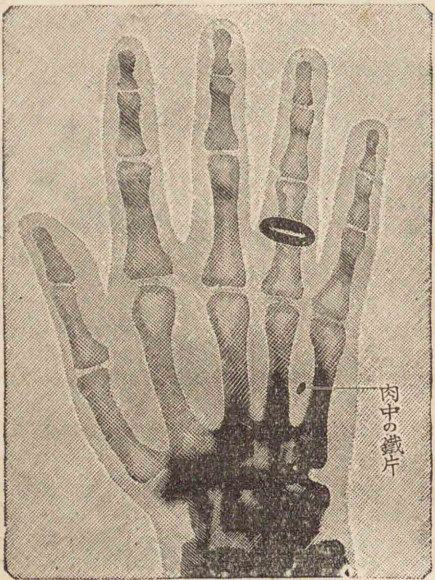
痲痺

違

焼切り、或は身體に電氣を通じて、痲痺・神經痛等を醫するなど、應用數ふるに違あらず。

次に、近來の發明の一なるエツキス光線を語るべし。

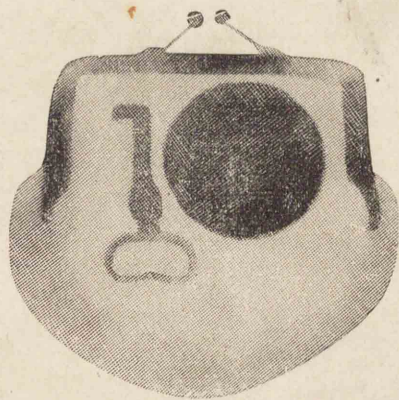
こは極めて稀薄なる氣體を充てたる玻璃管の中に、電氣を通ずる時に發射する一種の線がある物質に逢ひて發する光線なり。此の光線は、通



常の不透明體をも通過し得るものにして、これに對

透明

鉄



しては、竹木は透明なり。されども、金属は不透明に、動物の骨は、筋肉よりも稍、不透明なり。故に、此の光線にて照らす時は、人體の骨格、針箱の中の針、鉄等は、明らかに後の壁又は幕に映さるべし。醫師は、これを以て人體の深所に潜める彈丸等の所在を知ることを得。人工を以て雨を降らし得べきことは、學者間の説なりしが、近頃、電氣を應用して、好成绩を得たりといふ。數年前、奈良縣及び宮城縣

膏(肉)雨

鼓腹

造化

哩

險阻

にて試みしに、奈良に於ては、畝傍山を中心として、東西五里南北七里の間に、膏雨を降らし、枯れんとしたる稻再び生返り、百姓鼓腹して喜びたり。後來、電氣の領分は、いかなる區域まで進み、いかなる事を成し遂ぐべきか、測り知るべからず。實に造化の祕を奪ひ、鬼神夜泣くなどいふも、空しき形容に非ざるべし。

(新保磐次)

二〇 テセウスの剛勇 三

目ざすアテーネは、二十哩の内にあり。路は、ペルネス山脈の中に入り、その險阻、今までに數倍せり。さ

只管

れども、テセウスが雄心は愈踊り、巖を攀ぢ、樹の根を踏みて、只管急ぎけるに、兎角して夕暮近く、一つの谷に下りぬ。暗き木立はこゝに盡きたり。谷の中には一條の小川流れ、緑の草一面に兩岸を埋め、羊など此處彼處に遊べり。小川に沿ひて暫く行くに、側なる小山の林の中に、想ひもかけず大きな石造の家あり。蔦蔓あまた壁より屋根にはひたる、いと趣あり。

蔦、蔓

幽(ま)谷
訝る

鄙し

會釋

斯かる幽谷の中に、如何なる人の住まへるにかと、訝りつゝ、見てあれば、家の中より、身形鄙しからぬ一人の男、路の邊に出で來て、笑顔に會釋しつゝ、「今宵は我

卓(十)

癒ゆ

葡萄

が家に明かしたまへ。」と懇請す。言葉づかひさへ品ありて、「かくも寂しき處なれば、客人としてはいと稀なり。我等の楽しみは、旅人に宿を貸し、卓上にて異境の物語を聞くにあり。日も暮れたるに、見苦しくとも、いざ一宿したまへ。世に珍しき寢床を設けて、御身をもてなさん。そは如何なる旅人にも適すべき寢床にして、病も疲も夢の間に癒えぬべし。」といふ。テセウスは足も疲れ、腹さへ飢ゑたれば、主人の厚意を謝して、導かるゝまゝに庭に入りつ。主人はテセウスを門の側なる葡萄棚の下に待たせ、「此處にて暫時休息しておはせ。我はその間に寢床の用意せん。

しばし寢床に疲を休めて、さて食卓に就きたまへ。今宵の御物語は、固く約束して候ぞ。」とて、主人はそのまま、内に入りぬ。

テセウスは後に残りて、四邊を見るに、其の住居の奢侈を盡せること、驚くに堪へたり。國王の宮殿といふとも、恥づかしからじ。驚きながら尙も此方彼方を見てありしに、忽ち、目の前なる葡萄の蔭より、美しき少女の顔現れ、此方に向ひ聲をひそめ、若き旅人よ、主人の寢床にな入りたまひそ。入らば起くる事叶ふまじ。とく谷を下りて、森の中に隠れたまへ。主人の來らば、逃れ給はんこと難かるべきに。」といふ。

な……そ

叶ふ

剝ぐ

所由

點頭く

「その主人とは何人ぞ。少女よ、語れ、又我が逃れ難しといふは何故ぞ。」と問へば、少女はなほも聲を潜め、口早に「主人はプロクラステスと云ひ、又ストレッツチャーと呼ばれて、實は人剝にて侍り。年頃此處に住み、旅人を家に引入れて、鐵の仕掛ある寢床に息はせ、之を殺して衣服路用を奪ふを業とす。此の家に入りて、脱れたる者一人も無し。」と答ふ。テセウスは敢へて驚かず、「いで、そのストレッツチャーの所由はいかに。又仕掛ある鐵の寢臺とは、如何なる物ぞ。」少女は點頭き、「主人はその寢床をば、如何なる旅人にも適すべしといひしならん。實に何人にも適して侍り。そ

滑車

を如何にといふに、旅人の身の丈餘り長きときは、主人は斧もて切縮む。又短きときは、繩を結びて引伸ばす。頭と足とに繩を結ばれ、滑車にかけて引殺されたる者、數を知らず。これによりてストレッツチャ―とあだ名し侍るなり。と云ふ。テセウスさてこそ、聞及ぶ賊なりしか、やがて目に物見すべしとて、獨り點頭き居けるに、少女は此の時あわたいしく、あれあれ、主人の來る足音す、早く外へ。といひすてて、其のまゝ姿は隠れけり。

二一 テセウスの剛勇 四

茵

主人プロクラステスは、以前の戸口より出で來り、先の如く満面に笑を浮かべて一禮し、想の外に暇取りたる罪は許したまへ。寢床も程よくしつらひたれば、いざ案内申すべし。心よく一睡したまはば、其の間に食卓の用意も調ひなん。旅路の御物語の待遠さよ。と前に立ちて入り行く。テセウス後に従ひ行くに、住みよげなる奥の一室に、珍しき飾ある鐵臺の寢床あり。柔なる絹の茵の品よく敷かれたる様、そゝろに人を引寄するばかりなり。テセウスそと目を配りて見るに、別に怪しき所もなければ、一方の窓掛の陰に、彼の斧と繩との丈夫

蠅、蚊

儼 靈異

なる滑車に繋がれて掛れるを認めつ。「いざ若き殿、休まれよ。定めて路の疲もあらん。まづこゝにて一睡し給へ。家の者には静かにせよと言ひ置きぬ。蠅も逐ひて參らせん、蚊も拂ひて參らせん。いざとくこれにて休まれよ。」テセウスは點頭きて、「彼の珍しき寢床とは是なるか。」いかにも、先づ試みに入り給へ。好く御身に適すべし。「否、主人こそ先づ入りて見せ給へ。我は寢床の御身に適する様を見んと思ふなり。」プロクラステスあわてて、「否々、我は入るべからず。主人の入りなば、靈異を失ふべし。」テセウスは儼として、「黙れ、汝能く入るを拒まんや」と、主人

挫ぐ

白狀

を捉へて金剛力に取挫ぎ、そのまゝ彼の寢床の上を横たはらす。怪しむべし、今まで裝飾と見えたる鐵の足は、見るく主人を卷いて、械カギに掛りし罪人の如く、五體少しも動く能はず。苦しみ叫んで憐を請ふを、テセウスは冷かに視やりつ、「是汝の客人の苦しみし所なり。汝も少しは覺えたりや」と言ふに、主人は黙して語無し。テセウス立ちて、彼の窓掛の陰より、斧と繩と滑車とを取出し、又主人に向ひて、「こは何の品にて、何故に此の室に隠しあるぞ」と尋ぬるに、主人は愈辭無く、唯戦き泣けるのみ。「いざ白狀せよ。汝は引剝を行はんが爲に、數多の旅人を連歸りしな

らずや。又旅人を其の寢床に休ませ、此の斧もて頭
 足を切り、此の繩と滑車とにて、身體を引伸ばししな
 らずや」と責問ふに、主人はやうく、聲を絞り、仰一々
 覺えあり。願ふは罪を赦し、枕の側なる彈機（はじき）を抑へ
 て、我をば元になし給へ。家の中なる金銀、珠玉、殘ら
 ず御身に參らすべし」と言へど、テセウスは頭を掉り、
 「汝は人を捕へたるわなにて、自ら捕へられたり。わ
 れ人に無情なれば、人亦我に無情なり。ゆるく、天
 罰を味へよ」とて、苦しむ主人をそのまゝに、この室を
 出で去りぬ。

此の時、先に葡萄の蔭にて見たる少女馳來りて、殘忍

奴婢
 捕囚

なる人鬼を除きたるを謝しつゝ、物語るやう、わらは
 が父は、アテーネにて豪商といはれたる者なるが、一
 月以前、所用ありて此の山路を越えて、エレウシスへ
 と向ひつ。わらはは父に連れられて、野の鳥の如く、
 樂しく旅路に就きたりしに、此の家の人、剝父の黄金
 多く持てるを見て、誘ひて連歸り、父をば彼の寢床に
 て引殺し、わらはをば奴婢として使ひたり。わらは
 の外にも此の家には、不幸なる捕囚數多あり。皆彼
 の人鬼を恐れて、仇をも得復さず」と少女の委しく物
 語るを聞き、テセウスはそれ等の奴婢を盡く呼出し、
 それぞれに、賊が貯へたる財を分ち與へて、好む方へ

と去り行かせぬ。

斯くて翌朝こゝを立ちて、山路の旅を續け、程經て遂にアテーネの野に出でぬ。行く手に見ゆる大いなる市街は、即ち志せるアテーネにして、其の中央丘上に立てるアテーナ神の殿堂に近く、白き城壁の見ゆるぞ、父^{*}エゲウス王の宮殿と知られける。
(希臘神話)

二二 奇遇

白露戦争の始まる少し前の事である。余の勤務して居た四國の聯隊では、戦時編制の一箇大隊をこしらへて、伊豫の宇和島へ行軍したことがある。其の

編制

淳朴

合掌
老婆

爺
賽錢
撒く

溜む

時とある村落に著いたのは、最早夕風の寒い日暮であつた。行過ぐる村々の人達は、戦争の迫つた時ではあるし、殆ど總出で、路の兩側に立列んで、非常に歓迎してくれた。此の地方の人は、至つて淳朴で、中には珠數を懸けて合掌し、涙を雙眼に浮かべて居る老婆もある。路傍に正座して、伏拜んで居る爺もある。賽錢を投げたり、米を撒いたりする人もあつた。斯かる誠心からの歓迎に接して、余等是一種口に言へない感に打たれた。兵士の中には、涙を一杯目に溜めて、おれはもう死ぬ。どの面さげて生きて還れるものか。と、感極まつて私語くものもあつた。

從軍記章

余等は或村落に暫時休憩した。やがて此處を發して村外れに行けば、多勢の兒童が教師に引率せられて、夕風の寒い冬空に、行儀よく整列して歓迎した。其の前を通過する時、不圖見ると、兒童の中に十四五歳と見ゆる可愛らしい一女生が、左の胸に從軍記章を下げて居る。「はて不思議」と余は首を傾けた。怪しんだは余一人ではなかつた。大隊長森少佐は、馬を駐め、教師を手招きして、「一體この娘は如何したのです」と聞かれた。すると、教師は懇懃に答へて、「此の娘は此の村の某と云ふ者の娘です。父は日清戰爭に出征して、平壤の戰爭に戦死しました。此の娘

駐む
懇懃

は其の時僅かに四歳で、其からは母の手一つに育てられ、今は高等小學の二年生であります。實は今朝私の處へ來まして、今日は兵隊さんを迎へに、お父様の從軍記章を附けて行きたいと思ひますが、宜しう御座いますか」と聞きますから、それはまた何故か」と問返しますと、娘は泣きながら、此の記章は、大切なお父様の記念でありますから、これを附けて行つて、どうかお父様の分も一緒に歓迎いたしたう御座います」と申しましたので、私も思はずもらひ泣をして、快くそれを許したのであります」と言つた。並み居る一同は、このいぢらしい娘の顔を見、その心

項低る

犇

顫ふ

根を思うて、涙ぐまない者はなかつた。森大隊長は、手綱を固く握りしめたまゝ、項低れて、鬼をも怖れぬ武士の眼にも、涙をうかめて、男泣に泣いて居られる。と見る中に、俄に馬から飛降りて、此の娘を犇と抱き上げ、體を顫はせながら、低いけれど聲を立てて泣かれた。

はふり落つ拭く

伍長

これは餘りに意外であつた。余等は少からず喫驚して、如何した事かと見て居ると、其の中に少佐は靜かに娘を下して、はふり落つる涙をハンケチに拭きながら、一同聞いてくれ。不思議な事もあるものぢや。日清戦争の折、吾輩の部下に某と云ふ勇敢な伍

壤

遺兒

長が居つた。其の某は、吾輩と一緒に出征したが、残念にも平壤の戦争で、とう／＼戦死した。其の戦死の様は花々しかつただけ、哀も一層深かつたが、今聞いてみると、此の娘はその伍長の子だといふ。吾輩はもう何とも言へん。今日、此の子を見ると、この従軍記章が妙に氣に懸るので、聞いて見ると、思ひがけなくも、嘗て吾輩の部下にあつて、花々しい戦死をした伍長の遺兒だといふ。實に不思議の縁である。斯う云つて、少佐は又一しきり涙にくれたが、やがて涙をふいて、大分時間も経つた様ぢや。なごりは惜しいが、職務は棄てられん。行かう。と云つて、固く娘

脹る

の手を握り、決然として馬に飛乗つて行く。余も同じく隊を率ゐて發足した。やがて村を離れたが、娘は泣脹らした眼を一杯に見張り、別れたうもななさうに、何時までもく後を見送つて居た。薄れ行く夕日の影を浴びて立つた娘のいぢらしい姿は、今もこの事を想ひ出すと、眼先にちらくする様である。

(櫻井忠温)

いぢらし

二三 酒井忠勝

由井正雪の擧、まことは紀伊大納言頼宣頼宣のま卿の内命によるよし、彼の徒白狀し、それがさし出したる數通の

惱む

眞偽

所詮

内命書を検査するに、大納言家の判形、紛るべくもあらざりければ、井伊掃部頭直孝はじめ、時の老中、いづれも大に心を惱まし、浪人のみの事ならんには、いか様の結構なしたらんにも、もとより深く憂ふべきに非ず。唯紀伊家に基づく事ならんには、後日の事ども測りがたし。所詮御三家方一同を殿中に召させられ、豫て究竟の兵を便宜の所に伏せおきて、事の様によりては、紀伊家を搦め申さばやと密議す。酒井忠勝進みいでて、御判形紛れなき様には見ゆれども、尙親しく引合はせ、其の上委しく糺し申したる上ならでは、眞偽の程は決し難し。されば某紀伊家へ參

所勞

謀書

り向ひて、大納言家へ御直に承るべし。といふ。直孝
 聞きて、「そはさる事ながら、是より赴かん事いと危し。
 いかなる變の生ぜんも圖り難し。」といふ。「いや、く、
 忠誠のある所、天下に恐るゝもの何かあるべき。」とて、
 やがて、かの内命書を携へて行向ふ。
 大納言家所勞の由なりければ、御寢所にて苦しから
 ぬ旨申して、御前にいで、「世にはいたづらものの候う
 て、かゝる謀書を作りいだし、御難儀かけ參らせんと
 謀りて候。これ御覽あるべし。」といひさま、つかく
 卿の膝下にさし寄りたる勢、忠烈形にあらはれて、列
 座の家司を始とし、近臣いづれも愕然たり。 忠勝更

反古

に申しけるは、「此の書もとより謀書にて候はんなれ
 ども、猶御判形と合はせ見候べし。」とて引合はせ、「御判
 は巧みに似せ候へども、墨色大に違ひ候やりに伺ひ
 奉る。されば、此の證書は無用の反古に候へば、燒棄
 つべきものに候。」とて、即ち之をひきやぶり、申すまで
 もなき事に候へども、御判形は大切のもの故、御身近
 く召使はるゝ人と申さんにも、御油斷なからんこと、
 肝要の事に候。」と申す。卿此の時はじめて言を發か
 れ、「かの書の事は、いさゝか覺えなし。さりながら判
 形あるからは、近習の者といへども、油斷すべきにあ
 らず。」とて、詰めあひ居たる近臣の方を打見やられけ

扈從

徒黨(黒)

大身

れば、扈從なる加納某、靜かに默禮して席を立ち、縁に出づと見えたりしが、忽ち腹をぞかき切つてける。されば、正雪が事は、全くかの徒黨の者に止り、事故なくてをさまりぬること、まことに忠勝がはからひ其の宜しきを得たるに依るとぞ聞えし。

加納が腹切りたるは、御判ぬすみし申譯とは聞えたれど、實に然りしや。其の子平治右衛門は、幼年にして父にわかれ、熊野の奥にて生長せしが、光貞卿の時に至りて召出され、次第に祿を加へられて、大身となりぬとぞ。

(中村秋香)

二四 扇の的

弓手

几簾

馬手

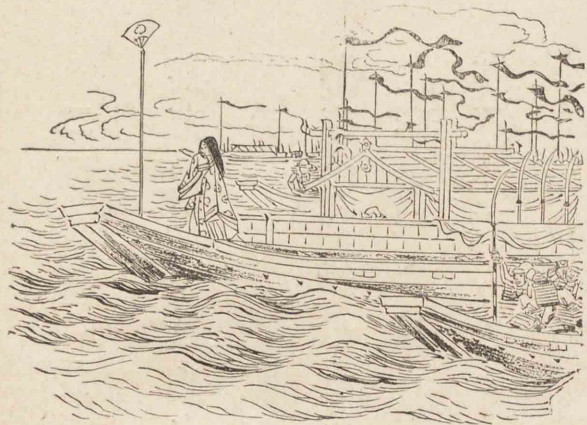
與市は馬をうちよせて、弓手の沖を見渡せば、御座の御船や女官の船、屋形屋形の前うしろ、御簾几帳もさゝめけり。

馬手の沖には楯甲、兵船數百漕ぎ竝べ、鳴りを靜めて平家の一門、

阪東

一段

狂ふ



陸にはもとより源氏の勢、
大將義経を始とし、
阪東の弓取數千騎、

今日を晴とぞ眺めける。

處は海も遠淺の、
一段ばかり乗出でしが、
與市が馬は沛艾ばいがいの、
潮に狂へる折こそあれ、
夕西風の吹立ちて、
船の的さへ定まらず。

神祇

冥加

祈念

與市は眼を閉ぢ、氣を凝らし、

「南無八幡大小神祇、

弓矢の冥加あるべくば、

扇の的を鎮めたまへ。

源氏の武運極まりて、

家の果報も盡くべくば、

我をば海に沈めたまへ」と、

祈念を終へて目を開けば、

扇は座にぞ鎮まりける。



鏑矢

拔きたる鏑矢は十二束、
 弓に番ひて引固め、
 みやる的はあなおそろし、
 天津日影の御影なり。
 要の程をと志し、
 兵と放つ矢心地よく、
 かつちと答へて要は船、
 扇は空にひらめきて、
 海へさつとぞ入りにける。
 平家の勢は舩をうち、

籠

源氏は籠鞍の前輪
 一度に叩き、聲々に
 射たりや射たりと喝采す。
 元暦元年彌生の末、
 西日落つる壇の浦、
 那須の與市宗高が
 譽ぞ今に残りける。

(明治讀本)

二五 學生日記

十二月二十五日。晴。今日より休暇となりて、身體
 伸びくす。冬の日影ほかくと障子を透きて、山

忌中
仕事師

茶花の花二三映れり。昨日までの學校の忙しさを想へば、夢の如し。仕事師門松を立てに來る。門に出でて見る。例年よりも大きなるを立てたり。隣家山田君の宅は、忌中にて立てず。

家に入らんとする時、郵便脚夫、クリスマス*の美しきカード*をもたらす。永井君のなり。直ちに豫豫て求め置きしカードを贈りて答禮す。

夕、同君を訪ひて、クリスマスツラナの式ツラナに列る。飾られたる常磐樹ツツに映る燈影、あかく神々し。樂の音、讚美歌の聲、莊嚴の氣、和樂の象、交、君が家に滿つ。更けて出

讚美歌

鉛

賑ふ、欣々
披く
藝術
鑑賞

づ。星多き夜なり。

二十六日。曇。終日、父上の年賀狀の表書す。五百枚書きあげしは、夜の九時頃なり。鉛筆やペンのみ持ちし手の、久々に筆を執りし故にや、肩張りて堪へ難し。入浴して臥床。

二十七日。晴。午前、父上小遣を餘分にたまひたれば、中西屋に駆けつけて、新著のスタヂオ*を求む。歳暮の街の賑しき中を、此の書かへて欣々として歸る。早速披き見て、外國の進歩せる藝術に驚く。折柄、田中君來る。共に展觀して、鑑賞夕に至る。歸らんといふ同君を強ひて、夕飯を共にす。夜、同君と共

誌
新粧
目まぐるし

に出でて、雑誌屋の店頭立つ。新年號の各種累々として、とりぐりの新粧、目まぐるしきばかりなり。妹の爲に、少女世界を求む。

二十八日。晴。事なし。

二十九日。同前。

友垣

三十日。晴。午前、永井君よりカルタの練習に招かれたれど、行かず。午後、妹の友垣五六人打連れ來り、庭上にて羽子つき交す。

三十一日。曇。友人への賀狀に、十枚ばかり犬を畫く。妹傍より見て、皆猫の様ですぬ。と云ふ。「お前にも何か畫いて上げようか。」といへば、笑つて頭をふる。

盛裝
予(予)

推稱

雜煮

全然

一月一日。雨。後、晴。朝、起きしばかりの處へ、田中君盛裝して來る。予が寢ぼけ顔を見て、「去年とやいはん今年とやいはん」といふ。此の君は、級中第一の歌人として推稱せらるゝ人。上らずして去る。

雜煮を食べ居る時、妹みそつ齒を落す。予大に笑ふ。父上も母上も、厭な顔せらる。

午後、新聞の初刷來る。犬の繪に、これはといふものなし。予の例の猫犬も、全然棄つべきにあらずと思ふ。父上へは年賀狀、百通ばかり來りたれど、予へは一枚も來らず。夜、寶船「寶船」と賣りありく聲す。

二日。晴。後、曇。來れりく、一時に五六枚。しか

風邪

も繪葉書ばかりなり。藤堂君の愛犬を寫生せしもの、最も見るに足る。尋いで英文の賀狀來る。差出人の名を逸せり。新年早々、そつつかしき事かな。父上の追加の賀狀、百枚ばかり表書す。夜、左隣の家よりカルタ會に招かる。母上妹と行か。夜更くるまで賑なる聲止まず。

三日。四日。五日。風邪の氣味なれば、引籠りて新年の雜誌を讀む。

六日。晴。朝、近藤君、中村君來る。連立ちて今井先生を訪ふ。先生歡んで迎へられ、休暇中、何か面白い事があつたかね。と問はる。予、先づ「何もありません

でした」と答へけるに、「君等の年配の時分は、正月が面白いものだが」といはる。それより、「こんな歌を詠んだ」と示さるゝを見れば、勅題「新年雪」を詠ぜられたるなり。夫人の御手料理を戴き、夕刻辭して歸る。

七日。晴。休暇も今日限りなり。何となく心の淋しさを感じず。夕門毎の松取除かる。風寒し。

(日記文範に據る)

二六 觀兵式

閱 時宜

觀兵式とは、閱兵式と分列式とを併稱するものにして、時宜により、其の一のみを行ふことあれども、大元

軍紀

帥陛下臨幸の式に於ては、二種を併せ行はる。閱兵式は、陛下親しく整列せる諸隊の前を通御あらせられ、軍紀の振張を檢閲あらせらるゝ式にして、分列式は、閱兵あらせられたる後、其の軍隊の運動を觀覽あらせらるゝと共に、軍隊に於て敬禮を致し奉る式なり。曾て拜觀したる所によりて、其の概略を記し奉らんに、歩・工・砲・騎・輜重の諸兵、順次に整列し、陛下式場に著御あらせらるれば、指揮官以下前進して奉迎し、喇叭手は「君が代」の譜を奏し、諸隊は捧銃・捧刀、若しくは立槍の禮を行ふ。テント内の玉座に著かせらるれば、

譜

指揮官御前に進んで、將校以下諸隊の總員數を奏上し、次いで御閱兵の奉導をなす。此の時陛下は御乗馬にて、御手づから手綱を執らせ給ひ、皇族以下の扈從にて、まづ右翼の方に進み給ふ。各隊長は、數歩前進して敬禮し、聯隊長・獨立隊長は、各隊の總員數を奏上し、此の如くにして、親しく順次各隊を檢閲し給ふ。此の時各隊は捧銃・捧刀、若しくは立槍の禮を行ひ、喇叭手は「君が代」の譜を奏し、將校・下士卒、整々肅々として迎視・目送し奉る。斯くて各隊の前を通御あらせられ、御馬をテントの前に立てさせ給ふ。是に於て諸隊は、指揮官の號令

畢(用)る

により、右方に面し、縦隊を作りて、先頭部隊に閉收し、先頭部隊より順次行進し、指揮官は御前直前より六歩の處にて敬禮し、六歩を過ぐれば隊を離れ、陛下の右側に至りて止る。行進諸隊も、六歩前の處にて頭を右に轉じて、陛下の方を注視し、六歩を過ぎて正面に復し、各隊順次行進して分列式畢る。謹みて案ずるに、軍隊を集合整列して、觀閲に供すべきは、天皇、皇后、兩陛下、太皇太后陛下、皇太后陛下、皇太子、皇太子妃、兩殿下、皇太孫、皇太孫妃、兩殿下、其の他皇族殿下、陸軍大臣、參謀總長、陸軍大將、所屬軍隊に長たる將官、及び外國の皇帝、皇后、皇族等なりとは、陸軍禮

妃

統監

式の定むる所にして、我が大元帥陛下の大御心を軍事に注がせ給ふの深き、毎年兩度、陸軍始と天長節とに當り、練兵場に臨幸して、親しく觀兵の式を行はせ給ひ、又親しく大演習を統監し給ひたる後、及び軍旗を授與あらせらるゝ際等に、此の式を行はせらる。これ軍隊は即ち陛下の親しく統率し給ふものなる所以を示し、以て軍紀の振張を閲し、組織訓練の整備を督し給ふなり。

觀兵式は、明治四年、和田倉馬場先、日比谷、櫻田、半藏諸門に互る濠際に於て、兵隊整列式を執行せられたるに始まる。爾來、毎年兩度、歲首と天長節とに行はせ

定例

らるゝを定例とし、臨時にも行はせらるゝことあり。今や、軍備益整頓し、國運大に開けて、わが觀兵式は、東洋新強國の一大偉觀として、世界の注視する所とはなれり。

(宮中儀式略)

二七 古寫眞

昨日、日曜の暇に、書齋の整理をすると、古い寫眞を見出した。最早二十年近くもなつて居る上に、昔の幼稚な寫眞術で撮つたのだから、一體に茶色にぼけて、人の顔は幽靈の様に見える。何でも四五十人もあらう、立つたり踞んだり、腕まくりして肩を怒らした

耐ふ

顚骨、稜々
結悍
長髯

裕、虱

夥々し

り、澄ましたり、笑つたり、様々な態をして居る。見るから耐へ難いなつかしさが、水の如く身にしみた。右の端に、雲つく大男の陰から、僕も一口加へてくれ給へ。」と云ひ顔に、ちよこりんと小さな顔を出して居るのは確に僕だ。きつと口を結んで、頬の何處やらに笑を浮かべて居る。あゝ、是が二十年前の僕か。眞中の顚骨稜々、精悍の氣面に溢るゝ長髯の人は、西山先生では無いか。先生の左に、につこり笑つて居る、あゝ、これが彼の髯殿しい紳士の松村か。あゝ、小松、彼は家が貧乏であつたか、四季、裕一つで通して、虱が居ること實に夥しいので、「王猛先生」のあだ名があ

脂

癖

糊筒袖

俊敏

匹敵

つた。また、汗や、脂や、醬油や、種々の物に汚れた其の
 裕は、彼が起居する毎に、實にいふ可からざる奇臭を
 發するので、有名なものであつた。山鹿と云ふのは、
 僕に一歳上だが、如何にも鼻汁が出る癖があつて、其
 を筒袖で拭くので、彼が左右の袖は、糊をした様に光
 つて、鯨張つて居た。金井と云ふのは、俊敏にして、氣
 を負ふ少年で、満足な著物をわざ／＼綻ばし、羽織の
 紐は引切つて、觀世撚で結んで居た。河喜多と云ふ
 のは、見上ぐる程の大男、力も智慧も牛に匹敵する人
 物で、何時も、菓子をそつと持つて來ては、僕に八大家
 の素讀を習つた。志方といふ兄弟は、喧嘩ばかりし

鬱(鬱)

列傳

運命

て居て、或時、家許から先生に雉子を持たせてよこし
 たのを、「卿持つて行け。あなた御出で。」と兄弟互に譲り
 合つて、七日も八日も經つて、やつと二人で持つて行
 つたが、最早其の時は、腐敗しかけて居たさうな。荒
 井といふのは、非常に怒りつぽいので、「消炭」と云ふあ
 だ名があつたが、火の様に怒つたあとには、水の様にし
 んで、三日も四日も妙に鬱(鬱)いて居るのが癖だつた。
 若し一々記憶を呼起したら、一部の列傳を成すも容
 易な事だ。
 あゝ、人間の運命はわからないものだ。同じ釜の飯
 を食つても、身の行末は實に千差萬別。二十年前、一

塾

墮落

無頼

杳(杳)
沙汰

枚の寫眞に顔を並べた西山塾生の中には、未だ四十にならずして、最早姓名を不朽の卷に彫つた人物もある。或は村長をして居る者もある。縣會議員もある。俊秀の才子、身を誤つて車夫とまで墮落した者もある。また、悲しいかな、道を失して無頼の徒とまでなつた者もある。一滴の水が大海に落ちた様に、二十年來、杳として音沙汰もなくなつた者もある。寫眞の顔を見れば、いづれも活潑に、無邪氣に、すぐれて秀でた人もなく、また悪人も居ない様だが、實際の運命は、實にさまざまで、人生の不可思議、思へば實に暗涙に堪へない。

(徳富蘆花)

二八 貧窮の利益

赤手

匙ヒ

倫敦デーリーニュース記者、嘗て北米の大富豪アン・ドリユー、カーネギー氏に對ひて、「赤手にして巨萬の富を獲取し得べき資格は如何」と問ひけるに、氏は答へて、「その資格の第一は、貧家に生まれて貧家に生立たんことなり。彼の生まれながらにして銀の匙を手にする者は、終に富豪たるべき資格なし。極貧に處し、死ぬるか活くるかの窮境に陥りて、そこに家庭の和樂と安寧とを味ひ知り、なほ一家離散の慘狀を見せずば、やまじと迫り來る貧乏の追窮より、如何に

能力

もして脱せんとの大決心を固めたる者にあらざれば、斷じて眞の富豪となること能はず。人は斯かる境に立ちてこそ、始めて其の全能力を發揮し得るものなれ。といひしとぞ。

垂死

げに、氏の幼時は、悲惨極まれる者なりき。十一歳の時、或夜更けて、父の外より歸り來れるを見れば、其の顔色青ざめて、恰も垂死の人の如し。さて其の母と打語らふを聞けば、終日奔走しけれども、つひに職を求むること能はざりければ、今ははや、他に策を講ずるの已むを得ざるをかこてるなりき。氏は之を聞きて、子供心にも、悲哀・痛恨の念胸に溢れ、いで、力のか



志しぬ。
千八百四十八年、秋もはや末つ方、氏の一家は米國に著し、少しの知るべをたよりて、ペンシルバニア州のピッツバーグといへる處に、はかなき住居を構へぬ。斯くて氏の

新しき奮闘的生活は、こゝに其の端を開くこととなりぬ。

汽罐

信使

翌年の秋、十二歳の時、氏は僅かの給料にて木綿工場に雇はれ、毎日、日出前より日没後まで、間斷なく絲卷きの業を勵みぬ。居ること一年にして、汽罐の火夫となれり。漸く十三歳に達せる少年に取りては、こは實に堪へ難き重荷なりき。されば氏は夢寐にも安んずること能はず、中宵枕を蹴て起ち、汽罐の熱度を檢するの態をなししこと、屢なりしといふ。十四歳の時、氏は市の電信局の信使となりぬ。氏の喜譬ふるに物なく、益誠實にその職を勤めたりき。後年、氏當時を想ひ出でて、卓上には書籍あり、新聞紙あり、ペンあり、インキあり、鉛筆あり、紙ありき。使の

茲

措く

登龍門

暇には、余は是等を使用する事を得たり。あゝ、余は實に暗黒を出でて光明につき、地獄を去りて極樂に入りたる感ありき。と語りしとなん。絲卷きの時より勤勉遙に人に過ぎたりしが、茲に至りて一層その度を増し、信使の職を勤むる傍、電信の技を習得し、二年にして遂に電信技手となれり。斯くて其の技能は日を追うて進み、當時米國の電信技手中、耳に聽き、て直ちに電文を解する者、氏を措きては他に一人だになかりしと云ふ。其の技術の熟練、以て知るべきなり。さればその昇進も甚だ速く、十六歳の時には、五磅ポンドの月給を受くることとなれり。氏が立身の登

龍門ともいふべきスコット氏の會社に關係を有するに至りしは、實に此の際の事なり。

氏の奮闘は、斯くの如くに慘憺たるものなりしが、氏は家庭に於ては、決して不幸なるものにあらざりき。涯りなき慰藉と光明とは、こゝに見ることを得たり。父は取立てて云ふほどの人にもあらざりしが、母なりし人は敬虔にして慈悲深く、常に蜜の如き甘き慰撫と、光の如き強き獎勵とを以て氏に臨みしかば、身體綿の如くに疲れ、氣息奄々として歸り來れども、翌朝は旭日登天の英氣希望を以て、再び生活の征途に上ることを得たり。

敬虔
獎勵
奄々

富王侯を凌ぐ今日に於ても、氏が猶貧乏の利益を主張し、窮厄の幸福を説いて止まざるもの、全く此の時代の尊き經驗より來れるなり。

(實業青年國語漢文讀本)

大正讀本 卷二終

註釋 (卷二)

我が國の人の生死の年は年號で出し、西洋人には耶蘇紀元を用ひ、支那人はおほよそに何々の世の人と記した。

- アテーナ神 || ギリシヤの女神、智慧の神。
- アブラハム、リンカーン || 北米合衆國第十六代の大統領。一八六〇年大統領に選ばれ、一八六四年にも再選され、一八六五年に暗殺された。
- アンドリエー、カーネギー || 米國の鋼鐵業家で慈善家。蘇蘭の生まれ。
- 井伊掃部頭直孝 || 江州彦根の城主。徳川家康四天王の一人。家康から四代將軍まで續いて仕へた。萬治二年に亡くなつた。年七十。
- 岩村參謀 || 岩村團次郎、當時海軍中佐。
- ヱイクトリア門 || ハイドパークの西北隅にある門。
- エゲウス || テセウスの父。
- エレウシス || アテーネの西北にある都市。
- 大洲侯 || 伊豫大洲の城主加藤貞泰。
- オバーウエゼル || ライン河の邊に在る都市の名。

- カード || クリスマス、カードのこと、クリスマスの時、贈物にする繪。
- 紀伊大納言頼宣 || 家康の第十子。紀伊和歌山の城主。寛文十一年薨じた、年七十。
- クリスマス || キリストの誕生祭、毎年十二月二十五日に行ふ。
- 契沖阿闍梨 || 徳川時代の僧侶、國學者。元祿十四年に亡くなつた。年六十二。
- ケンタッキー || 北米合衆國オハイオ河の流域にある一州。
- 酒井忠勝 || 徳川家光に仕へ、大老となる。寛文二年に亡くなつた、年七十六。
- ジョージ、ウオシントン || 北米合衆國獨立戰爭の總督。一七八九年、第一代の大統領となり、一七九三年再選。(一七三二—一七九九)
- 白禪隊 || 第三回總攻撃の時、目じるしのため、白襷をかけて夜間に突撃した隊。
- スタヂオ || 英國の美術雜誌。
- ストレッチャー || 伸張者の意。人を引伸ばして殺すから附けた名。

○三階堂貞藤 北條高時の命を受けて、吉野、千劔等を攻め、後、南朝に降つたが、間もなく又謀反して誅せられた。

○二宮尊徳 幼名金次郎、相模の人。勤儉力行の模範的人物。安政三年に亡くなつた、年七十。

○乃木大将 名は希典、山口の人。旅順口を攻落して勇名を轟かした人。明治天皇御大葬の夜、殉死した。

○ハイドパーク ロンドン市の中央にある大公園。

○ピッツバーク ペンシルバニア州の西南部にある都市。

○フアイルマン 佛國人。複葉飛行機を發明した人。

○ブルドッグ 一種の猛犬。

○ブレリオ 佛國人。一九〇九年、單葉飛行機を作つて、始めて英蘭海峡を横断した人。

○プロペラ 推進器。通例飛行機の前面にあつて、發動機の方で、はげしく回つて、飛行機を進めるもの。

○ペルネス山脈 アテネの北方にある山脈。

○ペンシルバニア 北米合衆國の一州。ニューイン

グラント中第一の農業者。

○ボアソナード 佛國人。法律顧問として永く我が國に居た人。

○村上義光 護良親王に隨つて所々で戦ひ、遂に吉野で親王の身代りとなつて戦死した。

○護良親王 後醍醐天皇第三の皇子。遂に淵邊義博に殺され給うた。御年二十八。

○山田司法大臣 名は顯義、山口の人。明治二十九年薨ず、年四十九。

○萊因河 歐洲大河の一。源を瑞西に發して、獨逸を流れ、和蘭の海に入る。

○聯隊長 步兵第一聯隊長寺田中佐。

○ロンドンデリー ニューズリンドンで發行する新聞紙の名。

大正元年十月二十八日 印刷
 大正二年一月十八日 訂正印刷
 大正二年一月廿一日 訂正再版發行

大正讀本奥附

卷一	金貳拾七錢	卷六	金貳拾四錢
卷二	金貳拾八錢	卷七	金貳拾五錢
卷三	金貳拾六錢	卷八	金貳拾五錢
卷四	金貳拾六錢	卷九	金貳拾六錢
卷五	金貳拾六錢	卷十	金貳拾五錢

著 作 者 藤 村 作

發行 兼 印刷 者 大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

右代表者

專務取締役 宮川保全



發行所

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

郵便振替貯金口座 東京 二一九番

各府縣下 特約販賣所

各府縣下特約販賣所

丸善・青野・内田・三友・文林堂・大倉・水野・林平・杉本・文星堂・中西屋・文會堂・東京堂・二松堂・勉強堂・有隣
 堂・良明堂・東海堂・松邑・十字屋・北隆館・森江
 柳正堂 川瀨・永東 西澤・朝陽館・水琴堂・日新堂・盛文堂 煥乎堂
 多田屋 川又・寺田・明文堂 煥乎堂分舖・青木 磐岳堂 英華堂・藤崎・金港堂
 佐藤・文明堂 牧野・八文字屋・盛文堂 曙堂・藤島・東海林 今泉・今泉支店・青霞堂
 川南・富貴堂・魁文舍・一二堂 北光社・目黒・覺張・高桑・萬松堂・萬松堂支店・野島 郁文堂・郁文堂
 支店 中田・清明堂・學海堂 安屋・岩田 松村・三宅・柳原・吉岡・今井 松田・若林
 熊谷・中井・福浦・竹内 木原 宇都宮 品川 廣田 山陽書齋株式
 積善館・芸香堂 久松堂・徳岡・今井 川岡 超世館・日新堂・含英堂
 開文舍・開益堂 靜壽堂 向井・土肥 富士越 平安堂 五郎川
 平井・牧川 金文堂・佐野・積善館・博文社 長崎 甲斐・中岡・梅津
 吉田・金光堂 小澤 新高堂

大日本圖書株式會社

(大正元年十月調)

